

日吉台地下壕保存の会会報

第99号

日吉台地下壕保存の会

第18回横浜・川崎平和のための 戦争展開かれる

2010年10月16、17日、慶應義塾日吉キャンパス来往舎を会場に、18回目の横浜・川崎平和のための戦争展が開かれました。今年のテーマは《本土決戦体制とわが郷土》としました。日吉台地下壕を理解するためには、「本土決戦体制」とはどういうものであったのかを知らなければならぬからです。

来往舎1階のイベントテラスは不定形な平面が緩やかな傾斜を作り、部門別に展示するには最適で、しかも、銀杏並木を歩く人から丸見えのガラス張りなのですが、残念ながらわざわざ立ち寄る人は少ないようです。ただ展示見学者は全員じっくりと時間をかけ、丁寧に見てくれます。そして大抵丁寧にコメントを残してくれます。

17日に行われた「若者の発表」と、4人のパネリスト（山田朗・愛沢伸雄・新井揆博・北原高子）によるシンポジウム「本土決戦体制とわが郷土」は、どちらも大会議室が満員になるほどでした。聴くだけではなく、グループ討論など目新しいプログラムに対して好意的な感想が聞かれました。

18回続けてくると、展示に毎回新しい企画を付け加えても、すっかり新しくするわけではないので、マンネリ化していると言われることもあります。登戸研究所に関しては、今春「明治大学平和教育登戸研究所資料館」が開館し、誰もが自由に見学できるようになりました。この戦争展での役割はもう終えたのではないか、という気がしなくもありません。でも、全国的に定着しつつある戦争遺跡に対する認知度の高さ、多くの書籍の出版などに、私たちのささやかだけど継続してきた「横浜・川崎平和のための戦争展」が、少しは貢献しているのではないかと、密かに自負しているのです。

今年も会員の皆様の多くの方から、賛助金を寄せていただきました。ご自身は体調が悪く参加できないが、盛会を祈る、という温かいコメントを書いてくださる方もあります。私たち運営委員は、時としてくじけそうになることがあります、会員の皆様の物心両面の応援に、勇気付けられて活動を前進させることができます。心からお礼もうしあげます。



平和のための戦争展展示会場

○シンポジウム「本土決戦体制とわが郷土」資料

資料1 〈本土決戦〉とは何であったのか

歴史教育者協議会・明治大学 山田 朗氏

はじめに (報告の目的)

- [1] アジア太平洋戦争における〈本土決戦〉の位置を検証する。
- [2] 〈本土決戦〉体制の特徴を検証する。

I 〈本土決戦〉への道

1 1943年春頃から日米の戦力格差は歴然

- [1] 連合艦隊司令長官・古賀峯一の訓示「勝算は三分もない」(1943.5.8)
国力(生産力・技術力・輸送力)の差が前線の戦力格差となって歴然と現れてきた
- [2] 「絶対国防圏」の設定(1943.9.30)
- [3] 中部太平洋の防衛線崩壊(1943.11:マキン・タラワ「玉碎」)



山田朗氏

2 トラック海軍根拠地の壊滅(1944.2.18)とラバウル航空隊の撤退(2.20)

- [1] 米海軍の機動部隊による強襲(トラック・パラオ空襲、ラバウル孤立化)
- [2] トランク壊滅により防衛線はマリアナまで約1,000km後退 海軍航空隊(機動部隊)は消耗の末、再建中

3 マリアナ諸島をめぐる「決戦」(1944.6~7月)

- [1] マリアナ沖海戦(「あ号作戦」6.19・20):アジア太平洋戦争の事実上の天王山大敗北……空母機動部隊の事実上の壊滅(空母3隻、航空機400機喪失)
- [2] サイパンの陥落(7.7)=「絶対国防圏」の崩壊
沖縄も最前線に(8.22 学童疎開船「対馬丸」の遭難)
本土がB-29爆撃機の行動半径(2,900km)内に(テニヤン-東京 2,400km)
艦載機と潜水艦による海上封鎖の徹底
1944年6月以降、月あたり物資輸入 200万トンをわる(所要 300万トン)
- [3] 戦争の勝敗、ここに決す……サイパン陥落以後は、米軍の残敵掃討戦
ドイツも敗北必至(連合軍6.4ローマ入城、6.6ノルマンディー上陸)
陸軍が期待をかけたインパール作戦(インド進攻作戦)も失敗(7.1中止)
東条英機内閣の崩壊(7.18)

以後は、米軍にすれば「戦後」のための戦い、日本軍にすれば「決戦」後の出血戦

4 小磯内閣と「レイテ決戦」

- [1] 軍部強硬派の力強く、終戦にもつていいける人材なし → 小磯国昭内閣の成立
- [2] レイテ沖海戦(10.23~25)で聯合艦隊主力は壊滅(「神風特攻隊」登場)
- [3] 小磯首相、「レイテ決戦は天王山」と表明(12.19 大本営は「レイテ決戦」方針放棄)
- [4] レイテ決戦断念後、陸軍は完全に「本土決戦」に傾斜



シンポジウム

II 〈本土決戦〉への道

1 本土防衛から〈本土決戦〉に

[1] 本土での「決戦」構想の出現

サイパン陥落直後の「陸海軍爾後ノ作戦指導大綱」(1944.7.21)

本土での「決戦」を一つの作戦の選択肢として決定

ほかに比島方面、「連絡圏域」=沖縄・台湾方面、千島・北海道方面での「決戦」に想定。1944.10を目途として「決戦準備ヲ概成スル」とした

[2] 作戦準備進捗せず

南方資源地帯から日本本土への海上輸送路が脅かされ、本土の物資不足深刻に

東部軍司令部は10.13によりやく沿岸築城（砲台・レーダー基地）の開始を命令

[3] 例外的に進展した部門

「松代大本營」建設工事

「風船爆弾」の開発と実戦投入（当初は生物兵器=牛痘ウイルス搭載を予定）

→ ただし、「風船爆弾」は〈決戦兵器〉ではなく、後方攬乱のための〈謀略兵器〉

[4] 「レイテ決戦」（捷一号作戦）の発動（10.18）により、〈本土決戦〉準備はさらに遅延

2 〈本土決戦〉準備の本格化

[1] 「レイテ決戦」断念後、〈本土決戦〉準備は本格化

「帝国陸海軍作戦計画大綱」(1945.1.20)

「皇土特ニ本土及朝鮮ノ作戦準備」を「本年初秋迄ニ概成ス」と決定

[2] 〈本土決戦〉作戦計画の策定

大本營陸軍部「國土築城実施要綱」発令(3.16)

1945.7までの全陣地の骨格完成、1945.10までの完成を命ずる

大本營陸軍部「決号作戦準備要綱」発令(4.8)

[3] 〈本土決戦〉のための兵力総動員

敗戦時、陸軍は内地・朝鮮に294万の兵力を展開

→ 新たに150万人を徵集・召集して部隊を編成（装備劣悪・練炭も低い）

→ 内陸防御作戦から次第に水際防御作戦へと逆戻り（第1線部隊は水際で「玉砕」想定）

[4] 〈本土決戦〉のための労働力（補助兵力）総動員

義勇兵役法の公布(6.23)：国民義勇隊・国民義勇戦闘隊の組織

→ 〈本土決戦〉のための労働力兼補助戦力

3 〈本土決戦〉準備の実態

[1] 特攻兵器の生産と出撃基地（沿岸部）の建設（「震洋」「回天」「伏龍」など）

[2] 作戦用道路・飛行場の建設 → 関東地区「リ号演習」

[3] 沿岸部での陣地構築

[4] 軍司令部機能・軍需工場の内陸部移転 → 特に長野県

陸軍登戸研究所などの「秘密戦」研究部門、中野学校など「秘密戦」実施部門も長野県への石井式濾水機用の濾過筒の大量搬入（細菌戦を想定か）

資料2. 本土決戦にむけた第300設営隊の横須賀航空隊基地緊急戦備施設の設営

日吉台地下壕保存の会 新井揆博

海軍では本土決戦に臨むに当たって、戦備は全面的に特攻精神に徹したものとし国家の総力を結集戦力化の規模に於いて陸軍との総合戦備により所要兵力を整備する、主戦兵力を航空兵力（航空特攻兵力を含む）及び水中水上特攻兵力として之が戦力発揮に最重点を指向す

るものであった。



新井揆博氏

日本本土内には陸上航空基地は70ヶ所あるが、飛行機の有蓋掩体・隧道の新設整備なども急いで整備し、本土決戦のその時まで日本の攻撃機を温存するための急速施設設営を図った。

野島・夏島地下壕の建設

①、第300設営隊と「戦時日誌」

1944(昭和19)年7月15日、横須賀海軍第一部隊編成直後慶應義塾日吉キャンパスにG・F地下作戦室(連合艦隊司令部地下壕)を設営。館山航空基地飛行機隧道艦爆5機分を設営。改編編成後横須賀航空基地夏島飛行機隧道零戦40機分、及び主滑走路直結野島超大型飛行機隧道銀河20機分零戦20機分設営、高輪御殿(高松宮家?)防空地下室設営、長野大本營海軍側地下作戦室設営極秘着工後終戦。

下記の「第300設営隊戦時日誌」資料は、45年3月15日から着工した夏島飛行機格納・野島飛行機掩体壕設営を記した第二期(5月・6月分)記録の一部であるが、作業情況・兵器・設営機械保有数・居住区の分散・人事情況、その他 宮家防空壕作業派遣・朝鮮出身者思想調査に及ぶ貴重な資料で、この日誌は、かつて日吉台国民学校に駐屯していた海軍功績調査部によって「大東亜戦争功績調査資料綴」にまとめられ、現在、防衛研究所図書館に所蔵されている。

②、一般経過概要(第一期・第二期の計画)

- 4月30日までの第一期完成度について、野島隧道作業(幅20m全長155mコンクリート巻立)は、掘鑿3220立米、コンクリート3000立米(全工程60%)完成。
- 夏島隧道作業(幅14m長さ155m)は、掘鑿10000立米(全工程97%)完了した。
- 第二期計画、野島隧道(幅13m長さ240m)、夏島隧道(幅14m長さ165m)を新たに加え掘鑿開始。野島60m区間、夏島100m区間は7月15日、残部は8月末日完成予定。
- 空襲被害削除のため、主要機械・資材・衣糧など野島・大船地区に分散格納する。
- 兵士の住居も野島・夏島の作業場付近に居住区を分散配置した。
- この間新兵110名の基礎教育が1ヶ月行われている。

③、5月1日、

- 「下士官1名公傷」、神田恭一『横須賀海軍航空隊始末記』p228には、日時は明らかでないが「野島の地下室掘削工事中に、大きな落盤事故が起こって工事にあたっていた予科練たち数人が、生き埋めとなつたことがあった。ほとんどの者が自力で脱出したが2人の予科練は不運にも犠牲となり…」と記している。

○昼夜二交代作業実施。

海軍施設本部は、緊迫した戦局にあたって、

日課表		時 刻	日 課 記 事
夏季	冬季		
0500	0600	起床	
0515	0615	朝礼、勅諭奉唱、体操	
0545	0645	朝食	
0630	0730	作業始メ	
0900	同上	休憩	
0915	同上	休憩	
1145	同上	作業止メ	
1200	同上	昼食、休憩	時宜ニ依リ昼食後午睡(夏季) 又ハ採暖(冬季)セシム
1300	同上	作業始メ	
1500	同上	休憩	
1515	同上	休憩	
1700	同上	作業止メ	
1730	同上	夕食	
1745	同上	休憩、体操、球技、入浴等	
1825	同上	休憩、体操、球技、入浴等	
1825	同上	夜間作業又ハ翌日ノ作業準備	
2030	2130	夜間作業又ハ翌日ノ作業準備	
2100	2200	就寝、消灯	
備考			

本表ハ日課表ノ一例ヲ示スモノナルモ努メテ時間ヲ善用スルニ努ムルモノトシ作業能率向上ノ為ニハ必要ニ応ジ休憩時間ヲ短縮シ又ハ夜間(徹夜)作業等ヲ課スルモ作業員ノ体力ニハ自ラ限度アルヲ以テ適時適切ノ修正ヲ加へ実施スルコト肝要ニシテ其ノ一例次ノ如シ

一 酷暑ノ候ニ於テハ日出時刻前ニ起床セシメ日出ト同時ニ作業開始シ午前清涼ナル間ニ最大能率ヲ挙ゲシメ午後ハ午前ノ疲労度ニ応ジ休憩時間ヲ増加シ午睡等ヲ採ラシム

二 雨天等ノ為作業困難ナル場合ハ起床時間ヲ若干遅延セシメ平素ノ疲労回復ニ資ス

三 雨天又ハ天候不良時ニ於テハ作業時間ヲ以テ室内各種教育を実施ス

四 休憩時間及食事ノ各前後ハ各種訓練精神教育等ニ利用ス

(注) 施教本第五号 昭和19年9月7日「緊急作業ニ從事スル特設設営隊及施設部隊勤務要綱」海軍施設本部(防衛庁戦史部図書館所蔵)による。

1944年9月7日付で、緊急戦備に従事する設営隊や施設部部隊の幹部に対して任務完遂の心得と勤務上の諸注意を喚起する要綱を示した。その付表に次のような日課表がある。

○横空より応援兵力685名、大船倉庫分隊57名派遣。

④、6月25日、

○東京通信隊長野施設設営予備調査の為調査隊兵力50名出発す。

○宮家防空壕応援作業終了。

(令達6月10日 参照。6月12日、下士官1兵20名貨物自動車3台に分乗東京に派遣)

⑤、第300設営隊隊長技術大尉山本将雄

○明治44生 技大尉 昭10東大工士 昭和18海軍の要請を受け施本8課に着任。Z7及Z8工法開発、後者による大型飛行機隧道施工法を創案し、特命により横施第一部隊創設（この間武官転官）後、甲編成第300設に改編、事実上軍令部直属の部隊長として各所秘工事、日吉のG F地下作戦室、館空及横空の大型飛行機隧道完成。松代大本營海軍側地下工事着工中終戦。

（『海軍施設系技術官の記録』より）

⑥、下士官兵・技術兵員数・人員の移動

⑦、主要兵器需品の保有

⑧、主要設営機械の保有

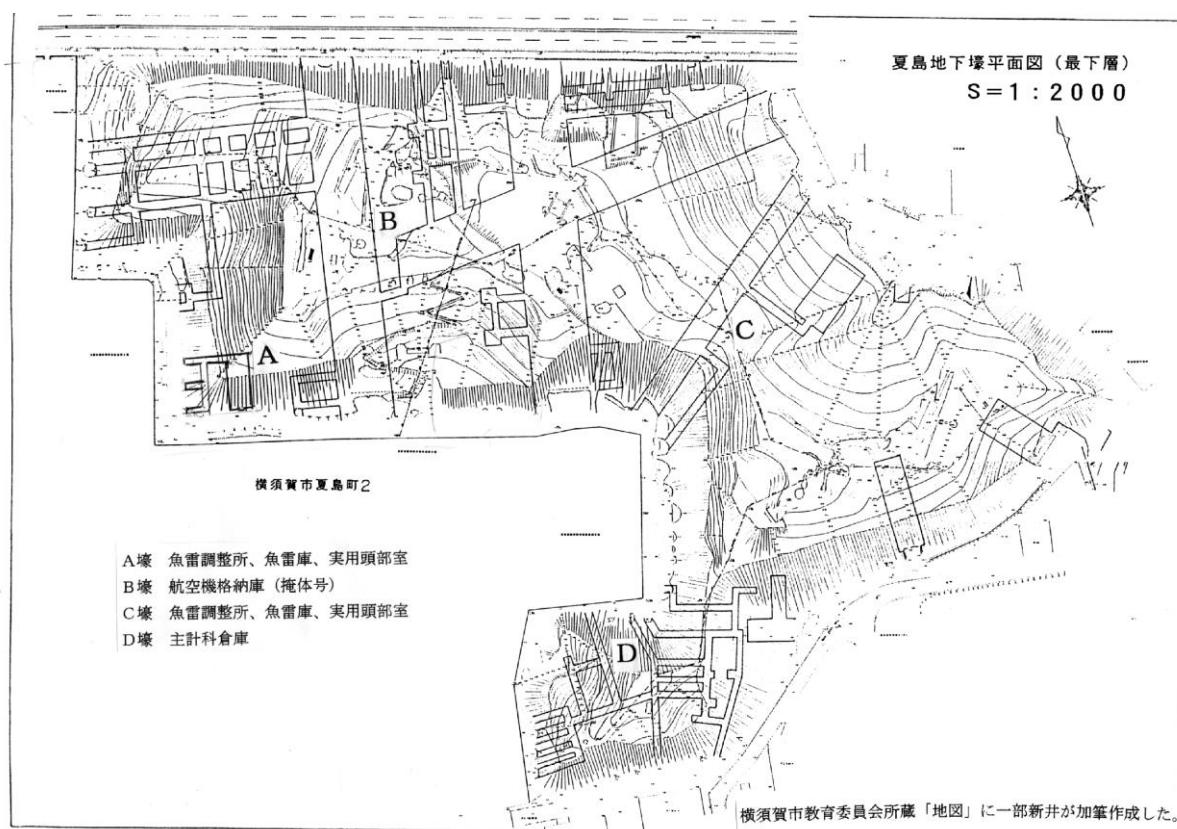
⑨、「戦訓」特になし。3月1日～4月30日の「戦訓」には次のように記してある。

○「爆薬欠乏対策として液体酸素を粉末木炭に侵漬して実用中なり、横須賀地方の如き軟岩に対しては一般ダイナマイトに充分代用し得、但し容器及毎日の運搬の点より見て之が製造工場に近きを要す」

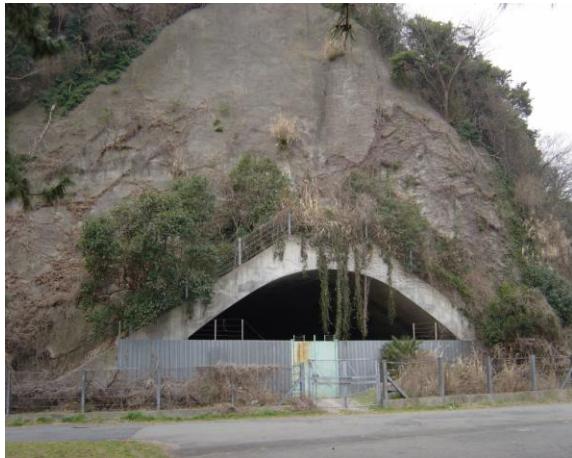
⑩、令達

○海軍総隊司令長官訓示

○半島出身者思想観察に関する件



夏島地下壕平面図(最下層) 横須賀市教育委員会所蔵 (新井加筆)



今も残る東側から見た野島掩体壕

上空から見た夏島『よこすかの文化財』より
右下に見えるのは戦時中の飛行機格納庫

資料3. 本土決戦～國体護持に備えた、松代への大本營移転計画

松代大本營の保存をすすめる会 北原高子

1、「大本營」関連の歴史

戦時または事変に際しての最高統帥機関。大元帥である天皇が陸海軍の最高指揮官として統帥。)

1893年5月 「戦時大本營条例」公布。

1894年6月 陸軍参謀本部内に大本營設置

8月 対清国宣戦布告。日清戦争（～95）

（大本營）参謀本部→宮中→広島（天皇も広島へ移駐）1895年解散

1904年2月 日露戦争 宮中に大本營設置→解散

1937年7月7日 盧溝橋事件→日中戦争

11月18日 「戦時大本營条例」廃止→軍令に
より「大本營令」公示

（戦時のみに設けることとしていた大本營を「戦時または事変」にも設けることとした。）

11月20日 大本營を宮中に設置～日中戦争・アジア太平洋戦争

1941年12月8日～ アジア太平洋戦争

1945年9月13日 解散

11月30日 「大本營令」廃止

2、大本營移転前夜

- ・絶対国防圏（1943年9月設置）崩壊の危機

- ・トラック島・マリアナ諸島の崩壊→B29の本土攻撃可能に。

3、大本營移転の進言と適地の探索

- ・井田政孝の進言

（敗戦直前の8月15日未明、降伏反対を叫んで皇居を占拠した反乱軍将校の中により、阿南惟幾陸相の最期に立ち会う立場にいた人物。本土決戦論者。）

- ・“信州あたりに”適地探し。

井田政孝（陸軍参謀）・黒崎貞明（兵務局防諜課）・鎌田隆男（建技中佐）が同行

4、松代を適地とした理由



北原高子氏

- ①戦略的に東京から離れていて、本州のもっとも幅の広い地帯にあり、近くに飛行場がある。
- ②地質的に硬い岩盤で抗弾力に富み、地下壕の掘削に適している。
- ③山に囲まれた盆地にあり、工事に適する広い平地がある。
- ④長野県はまだ比較的労働力が豊富である。
- ⑤長野県は人情が純朴で天皇の移動にふさわしい風格、品位があり、「信州」は「神州」に通じる。防諜上も適している。(日本は現人神である天皇が治める神の国と教えられていた) ※

※⑤語呂合わせで気に入った「皆神山」は崩落が激しく、用途を変更したと言われる。

長野市松代町は…

- ・旧石器時代の遺跡、縄文・弥生時代の集落跡、古墳など。
- ・国指定大室古墳群（積石塚古墳中心）約500基。
- ・戦国時代の山城跡。
- ・川中島合戦（12年間、5回の戦い）の武田信玄の海津城跡→現松代城
- ・江戸時代、約250年間真田氏10万石の城下町。
- ・幕末の思想家佐久間象山、近代女優松井須磨子、作曲家海沼実などの活躍。
- ・妻女山での日本陸軍の演習

5、「大本営」移転の目的の変化と関連施設工事（松代倉庫工事）

◎戦局の悪化により目的が変化しつつ、明らかになっていく戦争の行き先！、

- ①激しくなった米軍の本土空襲を避け、大本営を安全な場所に移転し指揮系統を守る。

1944年10月「マ（10.4）工事」（イ・ロ・ハ地区）

大本営作戦室、政府・日本放送協会・中央電話局、皇族用住居（のちに食料庫に変更）

- ②避けられない「本土決戦」に備え、大元帥（天皇）を安全な場所へ移す。

1945年3月「マ（3.23）工事」

仮皇居（天皇・皇后・宮内省用）、通信施設等

- ③敗戦は必至となるが「国体」（天皇制）護持の拠点とする。

1945年7月「マ（7.12）工事」

皇太子・皇太后用、賢所（三種の神器保管）

（松代大本営等の工事概要）

	倉庫名	場所(現在の市・町)	工事命令	用 途	構造	壕数	出来高
1	イ号倉庫	象山（松代町）	マ（10.4）	政府・NHK・中央電話局	地下木造	20本	80%
				付属 廁	木造平家	—	80
2	ロ号倉庫	舞鶴山（松代町）	マ（10.4）	大本営	地下木造	5	90
				付属廁	木造平家	—	50
3	ハ号倉庫	皆神山（須坂市）	マ（10.4）	食料庫	地下木造	6	100
				付属廁	木造平家	—	100
4	ニ号倉庫	鎌田山（須坂市）	マ（3.23）	送信施設	隧道	3	70
5	ホ号倉庫	雁田山（小布施町）	マ（6.8）	送信施設	—	—	0
6	ヘ号倉庫	臥竜山（須坂市）	マ（6.8）	送信施設	—	—	0
7	ト号倉庫	妻女山（松代町）	マ（3.23）	受信施設	隧道	3	65
8	チ号倉庫	善白鉄道隧道 （芋井村）	マ（7.12）	皇太子・皇太后	隧道	3本	0
9	リ号倉庫	薬師山（千曲市）	マ（7.12）	印刷局	—	—	0
10	仮皇居		マ（3.23）	天皇・皇后・宮内省	地上 半地下覆土式 地下木造		90
11	賢所	弘法山（松代町）	マ（7.12）	賢所	—	—	坑口
12	海軍壕	小市（長野市）	6.26	海軍省・軍令部	—	1	約100m

注:工事命令月日は、1~3が1944年、4~12は1945年。

6、大本営移転に関わって苦しめられた人々

①地域の人々

- ・地下壕建設用地（地下壕・飯場・道路・資材置き場、弾薬庫等の用地）の提供、墓場の移転など。
- ・「天皇御座所」建設に伴う109戸の強制立ち退き、自分の田畠・山へは衛門で鑑札を見せての出入り。
- ・大工、左官など専門職職人の動員。大学・専門学校生は設計施工の助手。トロッコ押しやモッコかつぎなどの勤労動員、学徒動員。児童・生徒は掘削して出た石屑が目立たなくするために草木で覆う、千曲川で石屑の砂利をすすぎ落とす仕事などに総動員。
- ・爆破岩石の飛来、発破やコンプレッサーの騒音。
- ・「慰安所」にするための部屋（物置）を無理やり提供させられる。
- ・敗戦直前、8月13日の長野空襲。

②朝鮮人労働者

- ・1910年「韓国併合」以降、土地や仕事を奪われ、日本に来て炭坑・ダム・トンネルなどの工事現場で働いていた人々が親方とともに、または個人で、松代大本営掘削工事に動員され、地下壕の発破かけなどベテラン坑夫として働かされた。
- ・日本は不足する労働力を朝鮮人で補おうと1939年「労務動員実施計画綱領」を作成、はじめは会社などの「募集」方式、1942年からは「官斡旋」、1944年からは朝鮮にも「国民徴用令」を適用し、「徴用」の名で強制的に連行された人々が働かされた。形式は異なっていてもすべて国家動員で、軍部・官憲・資本家が一体となって強制的に動員したもの。
- ・松代には少なくとも5回にわたる強制連行があり、工事の最盛期には自主渡航で來ていた人も含め、6000人を超える朝鮮人が働いていたと思われる（松代大本営工事の最盛期には日本人も含め、1日1万人あまりが働いていたといわれている）が確かな数や内訳は判っていない。
- ・朝鮮人には、皇民化政策が徹底され、天皇崇拝、創氏改名、神社信仰、日本語強要などなど人間の尊厳を奪っている。
- ・雪が多く寒い信州の、湿地帯に建てた粗末な飯場（労務者用宿舎）に収容され、はじめは3交替、まもなく昼夜2交替で12時間労働。
- ・コーリャン中心の栄養のない、消化が悪い食事で、衣服・履き物の支給が極めて少なく、逃亡すると見せしめのためのリンチを加えられる、厳しい監視つきでの労働。
- ・工事の事故、病気、栄養失調などによる犠牲者があったはずだが実数は全く不明。十数人という推測から500～600人とする説まで多種。（軍の重要書類の焼却。請負会社も明確にしない。朝鮮の人を人間扱いしない感覚などに起因？）

③沖縄の人々

- ・本土決戦の準備を整えるべく、松代大本営を一刻も早く完成させようと急ピッチで工事をすすめる一方、沖縄では一日でも長く持ちこたえるための時間稼ぎの戦いを強いられ、犠牲に。
- ・「根こそぎ動員」と住民すべてを巻き込む戦闘。
- ・「生きて囚虜の辱しめを受けず、死して罪過の汚名を残すことなかれ」徹底した教えによる「死」。
- ・多種多様な文化の花開く素敵な沖縄が軍事基地として現在まで苦しめられている。

7、本土決戦に向けた長野県下の態勢確立（1945年）

- ・1月22日 陸軍管区改正の軍令→東部軍管区に「長野師管区」新設。
（「内地防衛の中核地区」その「本丸」。本土決戦における中核、拠点。）
- ・4月 1日 平林盛人陸軍中将着任。
- ・4月 1日 長野地区憲兵隊創設。隊長田中宗久

→2人の朝鮮人憲兵を松代に潜入させ情報収集

- ・4月～ 長野県下の学校に軍隊の駐屯・軍事施設の設置急増。
- ・5月 陸軍第九研究所（通称登戸研究所）の疎開
- ・6月 陸軍士官学校生徒1万人の移動疎開（大本営防衛を想定？）

8、敗戦間際のおもな松代大本営視察者（いざれも1945年）

- ・5月 東部軍經理部長滑川正義中将
- ・5月 大本営陸軍通信隊司令官佐々木省三少将
- ・6月 東部軍管区司令官兼東部軍司令官田中静壱大将
- ・6月13日 小倉次侍従・宮内省総務局長加藤進

（三種の神器の安置場所の指示→「陛下にもしものことがあっても、三種の神器は不可侵である。同じ場所しかも物置をあてることは許されない。陛下の常の御座所と伊勢の皇大神宮を結ぶ線上に南面して造営し、然もその掘削には純粹の日本人の手によること」）

- ・6月16日 陸軍大臣阿南惟幾大将
(6/21 沖縄守備軍牛島司令官に打電→「貴軍の忠誠により本土決戦の準備は完了した」)

9、天皇の松代移転は？

- ・天皇・皇后の動座のための特殊装甲車「マルゴ車」の準備。
(黄色と緑の迷彩、戦車と同じキャタピラのついた車で、速射砲弾くらいは跳ね返す強度を持つ二重鋼板。時速40キロ程度で走る。内部は赤絨毯、シャンデリア、ソファ一設置。)
- ・1945年7月31日『木戸日記』（三種の神器の移転に関して）「…信州の方へお移しする心組で考へてはどうかと思ふ。万一の場合には自分が御守りして運命を共にする外ないと思ふ…」

10、敗戦後の松代大本営

- ・施設隊本部の解散、資材の払い下げ、朝鮮人労働者の帰国、
- ・口地区の施設は気象庁精密地震観測室に
- ・天皇の巡幸（1947年5月）

「この辺に戦時中無駄な穴を掘ったところがあるというがどのへんか？」

11、松代大本営から学ぶこと

- ・戦争末期の指導層の生き残り作戦、「本土決戦」「国体護持」のシェルターの役割を持つ松代大本営の存在と歴史を学ぶことで、アジア太平洋戦争の本質と指導層の実態と意図を理解することができる。
- ・松代大本営が使用されずに終わったが「国体護持」が放棄されたわけではなく、「国体護持」のための「終戦」が構想され、断行された事実から戦後史の問題点を照らし出すことができる。
- ・松代大本営は朝鮮人の労働と犠牲によって構築された。1910年以来の植民地支配の連続線上的問題であり、恥ずべき他民族支配の典型をみることができる。「加害」を認識しつつ民衆レベルの交流を模索することができる。
- ・戦争の持つ悲惨さと虚しさを物語っている巨大な地下壕を戦争遺跡として法指定し、後世に語りつぎ、平和を発信する生きた教材として活用することができる。

12、おもな「保存運動」

- ・調査研究活動
　　遺構調査、聞き取り、文献記録調査など
- ・学習活動
　　マツシロ学習会、フィールドワーク、調査研究結果の学習など
- ・案内活動

地下壕の案内、講演、ガイド養成講座、ガイド研修会など

・広報活動

会報「保存運動」(毎月)の発行、書物・冊子などの発行

・文化活動

憲法の森デー、11.11のつどい、平和祈念展、朗読劇、など

・戦跡保存運動

戦争文化財指定のための運動、戦跡保存全国ネットでの活動

・祈念館建設運動

平和祈念館建設のための運動

報告

平和のための戦争展----《若者の発表》に参加して

山田 譲

1. 「なぜ人はハチマキを巻くのか?」 専修大学付属高校 歴史社会研究会

戦争とハチマキと関係があるのか、ないのか? なにか関係がありそうでなさそうで、おもしろいテーマでした。日の丸を額につけたハチマキ姿の特攻隊員や、勤労動員の女学生の写真を見ると、いかにも軍国主義の時代状況をひしひしと感じます。しかし、あれは「後ろハチマキ」と言って戦いや儀礼の場の結び方なのだと、今回の発表を聞くまで思いもよらぬことでした。

これに対して「向こうハチマキ」は、働く者が仕事に気合を入れるために結ぶのだそうです。たしかに昔の大工さんや魚屋さん八百屋さんは「向こうハチマキ」でした。今は大工さんもヘルメットをかぶるようになり、「向こうハチマキ」はすっかり見なくなりました。といえば労働組合には団結ハチマキというのがあって、ストライキとなるとやっているのを以前はよく見かけましたが、あれはやはり「後ろハチマキ」でないとカッコがつきません。結び目の前後で意味がちがうとはおもしろい話でした。

2. 「新鶴見操車場と戦争」 住吉高校生、昭和鉄道高校生

武藏小杉から川崎に向かう南武線は、急に右に大きくカーブして90°近くまがる。これは実は建設予定だった新鶴見操車場を迂回して線路をひいたせいなのだと思います。はじめの計画では川崎駅から鹿島田駅あたりをとおり中原駅まで、途中東横線と元住吉駅北側あたりで交差してまっすぐ進むはずだったそうです。私は新鶴見操車場は昔からあそこにあったという感覚だったのでおどろきました。しかも建設工事の前には地元の反対運動が強かったという話も驚きでした。それを関東大震災後のドサクサで強権的に農民から土地を奪い、東日本の貨物と貨車をここで集中管理する大操車場をつくったということです。

1929年に開業したこの操車場は1937年に二期工事も完成し、日中戦争のための軍用列車、軍用貨物車がここを使って戦地に向かっていったわけです。そして戦争末期には付近の軍需工場とともに激しく空襲され破壊されてしまいました。

私は毎日南武線にのり、操車場跡地の上を通る陸橋をわたって通勤していますが、いつも見慣れた操車場にそんな歴史があるとは思いもしませんでした。そこにあるのが当たり前だ

と思っていたことが、実は当たり前どころかたくさんの人たちの声と生活をふみにじってつくられたものだったと聞かされると、同じ風景が妙に重みをもって見えてきます。ちょうど日吉のキャンパスが、その地下にある海軍地下壕の存在を知ると違って見えてくるのと同じだなと思います。郷土の歴史も奥が深いものです。

3. グループ・ディスカッション 司会 専修大学付属高校 皆川雅樹先生

発表者の高校生4人と参加者が3つのグループ



グループ・ディスカッション

にわかつて「本土決戦になつたら何が必要か？」というテーマでディスカッションしました。私の参加したグループには専修大付属高校の2人が加わり、ひとみ座の須田輪太郎さんもいらっしゃいました。専修高校の2人はそれぞれ「車」、「武器」と言い、須田さんは「逃げる」、私は「会話力」と言いました。攻めてくる米軍相手にどうしたらいいのか、世代による発想の差がはっきり出ておもしろいものだと思いました。

今の高校生は「本土決戦」と聞いても戦場のイメージがほとんどわからないのだろうとおもいます。他方、戦中派の須田さんは生きのびるのに精一杯だった体験がにじみでていました。グループの結論としては、ともかく死なないために「食料」が必要ということでまとまりました。しかし「本土決戦」などに追いつめられる前に、開戦させないための平和運動がなにより大事だらうとおもいます。

ところでグループ・ディスカッションは会場から希望者を募ってやりましたが、全員をグループ分けして全員参加でやつた方がおもしろかったのではないかと思いました。司会者が「前に出てきてください」と言っても遠慮してしまう人が多かったので、もったいない気がしました。ともあれ私はこういう話し合い方式ははじめてだったので、人の話を聞くだけというのとは違うおもしろさがあつてよかったですとおもいました。

報告

戦争遺跡を巡る見学会

保存の会でお知らせしている『戦争遺跡を巡る見学会』はこの秋も行われ、参加された方々に好評を得ることができました。

○登戸研究所見学会

2010年10月2日（土）よく晴れた朝、小田急線生田駅に約20名ほどが集合し、今春開館したばかりの「明治大学平和教育研究所資料館」旧陸軍登戸研究所を見学しました。資料館の中は明治大学の院生や職員の方々、キャンパスの中は「旧陸軍登戸研究所の保存を求める市民の会」の方々の案内で廻りました。資料館はパネルや映像で「登戸研究所の設立の歴史的背景から第一科から四科までの各科の具体的研究内容に至るまで実に分かり易く展示されています。大学の戦争遺跡の活用として、その展示の仕方は将来慶應日吉にできることが期待される「平和資料館」に大いに参考になるものです。「登戸研究所」は偽札や風船爆弾や様々なスパイ兵器を研究し、科学技術と戦争との関係を考える上でも重要な所です。歴史関係者など文科系の方々ばかりではなく理科系の科学技術に現在関心を持たれている方々にも是非見学していただきたいところです。午後からは健脚の方々で秋の深まりを感じながら生田緑地から川崎民家園傍にある東芝の地下工場地下壕を回り、よみうりランド駅前で歴史を訪ね、よく歩いた見学会を終了しました。
(谷藤基夫)

資料

第4回日吉をガイドする講座 (2010年11月6日藤山記念館会議室)

「日吉の森の過去・現在・未来」—講演とキャンパス散歩—

経済学部教授・日吉丸の会代表 岸 由二

(岸先生が慶應義塾大学新入生向けに書かれた文章(慶應義塾大学生協の冊子『せいきょう123号』)を転載します。)

『キャンパスのエコロジカルな社会的責任を考えよう』

☆緑の大キャンパスへようこそ

入学おめでとう。経済も環境も難題激増の時代。なにを学び、どんな体験を積み、時代を生き抜く糧とするか。新入学のこの春は、様々な思いの交差する自省の時間があることでしょう。

そんな時間、新緑の銀杏並木をのぼり、巨木に縁取られた競技場を展望し、なんと素晴らしい緑のキャンパスと驚く新入生も多いことと思います。でも本当に驚くのはもう少し先です。

並木道をぬけ、記念館の右端まで足をのばせば、足元に急に開ける緑深い谷(くまむし谷)と呼ばれています。正面かなたの緑の尾根。その緑の光景全体が、これから諸君のまなぶ、日吉キャンパスのもう一つの世界なのです。36haの敷地に12haを超える森。その緑の大キャンパスが、いま地球環境危機の現実に直結しています。いったい全体、どこがどう繋がっているというのでしょうか。

☆地球の危機・足元の危機

環境危機は、小学生の頃からもう何度も勉強した。大半の諸君がそんな感想を持っていると思います。温暖化ガス大量放出による地球温暖化の危機。地球史の第6番目の大絶滅の始まりかとも言われる生物多様性破壊。温暖化危機に関する昨年暮れの国連会議は不調におわり、日本国ばかりは2020年までに90年比25%の温暖化ガス削減を公約。今年秋には、生物多様性条約第10回締約国会議が、日本で開催されます。

そんな社会の流れの中で、日々の暮らしの足元の家庭に、企業に、低炭素社会の実現にむけたさらなる省エネ・省資源・リサイクルの実践、そして生物多様性保全への貢献が要請されています。もちろん、緑濃い日吉の大キャンパスにも、です。

☆わがキャンパスは合格か?

企業の社会的責任(CSR:Corporate Social Responsibility)という言葉は受験界でもキーワードでしょう。温暖化危機、生物多様性危機への貢献をと、企業における環境分野のCSRは、企業イメージもかけ、真剣さを増しています。その努力は並々ならぬものがあり、講義の時間に、企業のすすめる先端的な環境貢献の現場を話すと、受験生たちから「まさか」の声が上がるほど。翻って知の拠点、専門家たちのひしめく大学はどうか。私の知る限り、大学キャンパスの歩みは、一部企業の水準に、なお遠く水をあけられているように見えます。環境貢献に関するキャンパスの社会的責任。もう一つのCSR(Campus Social Responsibility)とでもいるべき分野、とりわけ緑や水の危機に関する領域は、まだこれからが正念場というのが実態ではないかと思われます。この領域で、たとえばわが日吉キャンパスは、合格点をとれるでしょうか。

☆進む貢献これからの貢献

日吉キャンパスの環境社会貢献は、ちぐはぐです。校舎や諸施設を巡れば、各所にごみの分別回収容器が配置され、冷暖房制御も強化され、省資源・低炭素社会を目指す貢献が一目で分かる状況です。しかし大雨の日、銀杏並木を急流となって駆け下る雨水の光景や、建物と森が混在し、緑の適切活用・総合保全の面でなお混沌とした状況の広がるくまむし谷の現状を見ると、温暖化適応策領域の中心課題である豪雨時の治水・土砂災害対策や、生物多様性保全領域における環境貢献に大きな遅れのあることは明らかです。

保全努力を徹底して地域・領域の治水安全に貢献してゆくこと。広大な森の土地利用を整理して、土砂防災、生物多様性保全にしっかり貢献してゆくこと。キャンパスのエコロジカルな社会貢献課題として、いずれも筆頭の事項というほかありません。

☆地道な努力ようやく展望

教・職員、学生が無頓着だったのではありません。一部教員の間では1980年代後半から緑や水辺の調査が進められ、一部の授業あるいは教員も参加する団体等のレベルでは、森や水辺を再生する実践作業がすすみ、学校による斜面防災対応、枯死・倒木の続出する針葉樹林の緊急伐採と再生への試みも始まっています。それらが、全体観をともなった総合的な動きになるのに、本当に手間どっている。実態はそういうことかもしれません。

しかし本当に幸いなことに、昨年来の日吉事務室と一部教員の協働により、自然の現状、



岸由二氏

保水力や斜面安定や生物多様性の危機、そして守るべき緑や水辺の特性、さらにはキャンパスに広がる多彩な歴史遺産の集約など、ようやく総合的な基礎資料も整う見通しとなりました。キャンパス構成員の多分野での総合的な自覚深まり、猛勉強始まる。この動きは、塾全体の総合的なキャンパス環境貢献の工夫につながってゆくに違いないと、大きな期待を寄せてています。

温暖化適応策や生物多様性保全にかかるエコロジカルな社会的責任の推進にむけ、日吉キャンパスは、いまようやく本格的な工夫の始まる春を迎えています。

☆多彩な参加が求められている

そんな工夫の現場に、もちろん新入生諸君も、多彩な回路で参加することができます。温暖化緩和策、温暖化適応策、生物多様性保全のリアルな現場に関与するメニューが、すでにあるつもあるからです。信頼できる教員の指導する環境学習サークルに参加するもよし。講義要綱で関連しそうな実践的な講義を探すもよし。生物多様性回復の現場に直に関与したければ、まむし谷の＜一の谷＞、＜鬼の寝床＞、＜普通部の森＞で進められている、教員・生徒・学生・市民の実践（＊、＊＊）に飛び込んでみるのもよし。しかし、まずは力まず、入学記念で手元に届いたはずの「日吉キャンスマップ」を手に、記念館東の緑の谷、まむし谷の散歩などからはじめましょうか。その散歩から、あなたの地球環境貢献が、はじまるはず。

* 日吉丸の会 HP : <http://www.geocities.co.jp/NatureLand/4964/>

** 日吉の森に学ぶ会 : <http://web.hc.keio.ac.jp/~fukuyama/hiyoshi/>

「環境を知るとはどういうことか・・流域思考のすすめ・・」：養老孟司・岸由二 PHP,2009

寄稿

ホトケドジョウのつぶやき

僕はホトケドジョウのヒヨシマルである。住んでいるところは鶴見川流域矢上川支流域までの川支流域まむし谷支流域一の谷である。ここは人間が週に1回、雑木林の整備に来てくれる所以快適だ。その人達の話によれば僕たちは絶滅危惧種だそうだ。道理でここに引っ越してくる前は、住みにくくなり、友達が少なくなってきた。でもここはアオイトトンボ君などもいて安心だ。人間はここを横浜市港北区日吉慶應大学キャンパスまむし谷と言っている。よくわからない。僕たちの呼び方の方が地べたに密着しているので分かり易い。地べたに降った雨水はどこかを通って海に流れてゆく。地べたをその流れに沿って区分した方がより自然だ。また、その水のおかげで、水辺で生きている僕たちや緑の木々が生き活きと成長できる。でも、これだけ人間が住む場所をたくさんしめてしまうと何らかの対策が必要だ。人間も最近、環境危機とか、生物多様性危機とか、問題意識が高まっているようだが、実際には何をやっているのだろう。議論ばかりをしているような気がする。雑木林も伐採や下草取りなどをしないと死んでしまう。もっと地球の地べたをみつめた実践的な活動をしないと、人間だけしか住めなくなるかもしれない。いや、人間も住めなくなるかもしれない。でも、いつもここで会う人達が増えてくれば、僕たちも、またもっと多くの仲間たちも住み続けることが出来る気がする。この人たちには感謝している。ありがとう。

ホトケドジョウ ヒヨシマル

(聞き手 大西章)



再生した森のブナの木

連載**地下壕設備アレコレ 〈その1〉「蛍光灯」****山田 謙**

前号で受信機のことを書いたので、壕内設備で調べてわかったことをシリーズで書いておこうとおもいます。

地下壕の電信室、暗号室には（おそらく作戦室にも）蛍光灯が使われていて「真昼のように明るかった」（元通信兵下村恒夫氏・慶應生協ニュース69号）と言われています。蛍光灯は1926年にドイツのレクトロン社で発明され、1938年にアメリカのGE社が実用化し販売しました。日本ではマツダ電球（現・東芝）が1941年に製造・販売しました。電力消費が少なく明るいのが特徴です（『白い光のイノベーション』宮原諱二・朝日新聞社）。海軍ではまず潜水艦に使用され、空母隼鷹では電信室のほかに飛行甲板の中心線表示灯や尾灯にも使われました（『三菱長船電気ものがたり』富岡邦安氏の手記 三菱重工・長崎造船所発行）。戦艦大和や戦艦武藏でも使われています（東芝科学館展示資料）。それが日吉の地下壕でも使われていたわけです。

なお東芝科学館で長谷川崇さんが聞いた話では、当時の民間用蛍光灯の電源は交流100ボルトとのことです、戦艦武藏の電源は直流225ボルトです（『三菱長船ものがたり』建造船舶の発電機容量実績表）。蛍光灯の構造上、交流でも直流でも点灯します。地下壕内の蛍光灯がどのようなタイプのものだったかわかりませんが、軍艦と同じ直流225ボルト電源だったことは十分考えられます。ちなみに通信機の電源は、当時海軍で一番よく使われた92式特受信機改3、改4の場合、直流6ボルト（または直流100ボルト）と直流200ボルト（実物の表示では220V）の2つの電源を、蓄電池または艦内発電機からとるようになっています（自衛隊久里浜駐屯地歴史館の実物展示受信機の説明文）。照明用電源もこれと共に用だつた可能性が強いようにおもわれます。

訃報

本会初代会長永戸先生は病氣療養中のところ、薬石効なく2010年9月12日御永眠されました。先生の会へのご功績を惜しみ、謹んで哀悼の意を表します。

日吉台地下壕保存の会運営委員

永戸先生のこと**林 ちづ**

私は、慶應義塾日吉キャンパスに就職した時から、何故か永戸先生を知っていました。先生はそれほど有名な方だったのです。

慶應義塾労働組合日吉支部は伸び伸びとした活動をしていて、それは先生を中心とした若いメンバーの活力のせいだったのでしよう。生協組合の教職員委員会に属していた時に知った「日吉台地下壕保存の会」の会長も引き受けられ、例会に顔も出され、平和運動についての印象深い講演をなさいました。

先生のお話の中出てくるフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」ですが、この歌をきくと、ふしぎなことに、米の名画「カサブランカ」の中の、ドイツとフランスの国歌を歌いあう場面が思い出されてくるのです。（あれはアメリカ映画だったのに？）

酒場のシーンだったと思いますが、ドイツ軍人たちが、国歌を歌いはじめ、やがて対抗してフランス人たちが歌う「ラ・マルセイエーズ」が一人また一人と声が重なりドイツ国歌を圧倒してしまいます。その場面が非常に印象深く残っています。

今や全国的になっている戦争遺跡保存活動のきっかけである「日吉台地下壕保存の会」の



故永戸多喜雄先生

創設メンバーであられた先生の、人を魅了するあたたかな笑顔が忘れられません。

反戦、平和を守る運動に常に積極的であった永戸先生に、私たちは心から敬意をもち、日吉で活動できた事を誇りに思います。

永戸多喜雄先生の少し曖昧な経歴

中沢正子

大正10年8月11日生まれ。旧制中学の頃、音楽を自分で創りたいと思っていた。動機はドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」。少し勉強をしたが…（そう言えば2階の教職員食堂に古いピアノがあった頃、先生が美しいタッチで和音を2～3弾かれたことがあった）。昭和16年4月慶應義塾大学予科入学。予科は2年半に短縮。学部に進みすぐ兵隊に、3～4か月で病気、入院半年以上で陸軍を免職。帰って来て身体悪く休学のち文学部フランス文学科1年に復学。22年9月文学部卒業、卒論はパスカル。AFP通信社東京支局に就職。27年4月慶應義塾高等学校教諭。33年4月文学部専任講師。36年4月経済学部専任講師。43年4月教授に就任。54年10月～56年9月経済学部長。62年4月名誉教授。36年慶應義塾労働組合日吉支部執行委員長。39年同組合本部執行委員長。平成元年4月日吉台地下壕保存の会初代会長。4年5月より同会顧問。22年9月12日心不全のため逝去、89歳。11月20日15:00～日吉キャンパス食堂棟生協1階ホール「永戸多喜雄先生 お別れの会・忍ぶ会」開催。専門はフランス文学、訳書『意味と無意味』(モーリス・メルロー=ポンティ著)、『アルトナの幽閉者』(ジャン・ポール・サルトル著)ほか論文多数。

(『慶應義塾報』2219 2010.10.10、『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』4 1987、『慶應義塾年鑑』1979, 1981、『慶應義塾労働組合20年史』①より)



☆☆ 会報100号に寄せて原稿募集 ☆☆

日吉台地下壕保存の会会報は会発足以来、20年以上にわたり、会員の方々へ会の活動をお知らせする役割を果たしてまいりました。次号で100号を数え、記念すべき会報を発行することになります。そこで会員の皆様に100号を記念して、会への思いをお寄せいただきたく、原稿を募集致します。会の発展のためにも、多くの皆様の一言をお待ちしております。

- ・内容 ご自由にお書き下さい
- ・字数 800～1000字
- ・形式 ワープロあるいは手書き原稿
- ・締切 2011年2月末
- ・送り先 郵便 〒194-0045 町田市南成瀬6-7-8 谷藤基夫 宛
メール ohnishi@hs.keio.ac.jp (大西章)

☆活動の記録 (2010年9月～12月)

- | | |
|------|---|
| 9／1 | 平和のための戦争展実行委員会 (法政第二高校教育研究所) |
| 9／2 | 地下壕見学会 日吉台小学校6年生・先生 112名 |
| 9／4 | 地下壕ガイド学習会 (菊名フラット) |
| 9／6 | 運営委員会 会報98号発送 (慶應高校物理教室) |
| 9／13 | 地下壕見学会 愛知学院大学 15名 |
| 9／16 | 地下壕見学会 コープかながわ西区・中区 26名 |
| 9／25 | 定例見学会 40名 「日吉フェスタ2010」参加 展示・書籍販売 |
| 9／29 | 平和のための戦争展実行委員会 (法政第二高校教育研究所) |
| 10／2 | 《秋に戦争遺跡をめぐる》 「明治大学平和教育登戸研究所資料館」と大学構内に残る戦争遺跡 見学会 24名 |
| 10／6 | 地下壕見学会 花月九条の会 19名 |

- 10/7 運営委員会（慶應高校物理教室）
 10/9 平和のための戦争展 展示準備（日吉地区センター）
 10/15 平和のための戦争展 展示場設営（来往舎）
 10/16～17 第18回横浜・川崎平和のための戦争展《本土決戦とわが郷土》開催
 　　（慶應義塾日吉キャンパス来往舎）展示・若者の発表・シンポジウム
 10/19 地下壕見学会 県立大師高校 10名
 10/23 戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員会（慶應高校物理教室）
 　　定例見学会 44名
 10/26 地下壕見学会 東急協生館研修 25名
 10/29 地下壕見学会 学習院大学史料館 13名
 10/31 《秋に戦争遺跡をめぐる》房総半島の戦争遺跡 バスツアー 22名
 11/6 第4回 日吉をガイドする講座「日吉の森の過去・現在・未来」
 　　講師 岸 由二氏 慶應大学経済学部教授 （藤山記念館）30名
 11/7 地下壕ガイド学習会（菊名フラット）
 11/8 日吉地区センター自主事業「わが街再発見 日吉台地下壕①」学習会
 　　講師 茂呂秀宏氏 40名（日吉地区センター）
 11/9 地下壕見学会 湘南短期大学生生涯学級 35名
 11/11 地下壕見学会 若葉台地区センター 32名
 11/12 運営委員会（慶應高校物理教室）
 11/15 地下壕見学会 日吉地区センター自主事業② 40名
 11/16 地下壕見学会 栄光学園同窓会 歴史散歩グループ 28名
 11/25 地下壕見学会 セカンドライクラブ 22名
 11/27 定例見学会 53名
 11/29 地下壕見学会 駒林小学校6年生・先生 94名
 12/4 地下壕見学会 慶應義塾大学院システムデザイン・マネジメント研究科 13名
 12/8 地下壕見学会 日吉南小学校6年生・先生 88名
 12/11 定例見学会 44名
 12/14 地下壕見学会 慶應大学 日吉・歴史Ⅱ（安藤広道先生）24名
 12/15 地下壕見学会 洗足学園高校1年生・先生 14名
 12/18 第5回日吉をガイドする講座「慶應義塾史における戦争」
 　　講師都倉武之氏（慶應義塾福澤研究センター専任講師（来往舎大会議室）37名
 12/20 地下壕見学会 綱島小学校6年生・先生 135名
予定
 12/22 運営委員会 会報99号発行（慶應高校物理教室）

☆ 定例見学会（第4土曜日13:00～）2011年 1/22・2/26・3/26

☆ 地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで TEL 045-562-0443（喜田 午前・夜間）

連絡先(会計)亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里:横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス：<http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会